

ほんばこ



No. **69**

日本教育会館 附設 教育図書館通信

復刊第 69 号 (通巻第 85 号)

2023 年 7 月 12 日発行

〒101-0003 東京都千代田区一ツ橋 2-6-2

日本教育会館 5 F

教 育 図 書 館

Tel/Fax : 03 (3230) 4437

Mail : toshokan32304437@jec.or.jp

<https://www.jec.or.jp/tosho/>

● 目 次 ●

- ◆ 本と、父と母と
安村 美代 2 ~ 3 p
- ◆ 図書紹介 『みんなでつくるインクルーシブ教育』
『学校で育むアナキズム』 教育図書館 4 ~ 5 p
- ◆ 最近の受入図書 (2023年3月~2023年6月受入) 6 ~ 7 p
- ◆ 教育図書館のご案内 8 p

本と、父と母と

安村 美代

無類の本好きだと自覚している私。幼い頃から本に囲まれていたからだろうか。年の離れた長女のために買ったと思われる、世界少年少女文学のような厚い本がシリーズで揃えてあったし、童話もそこそこな量でおいてあった。親は親で、井上靖、山岡荘八、戸川幸夫、山本周五郎や藤沢周平など、いろいろな作家の本を買って並べていた。

小学生の時は江戸川乱歩にはまり、中学・高校生の頃は『赤毛のアン』や三浦綾子、遠藤周作など読んでいた。海外の作家の小説や推理ものが大好きだった頃もある。吉村昭、宮部みゆきや有川浩や原田マハなど、好きな作家のものは全巻揃えてしまうし、気になる文庫本はすぐ買ってしまうという癖も災いし、譲ったり売ったりしてもすぐに本がたまってしまう。

増えすぎた本を整理するにしても、絶対に捨てられない大好きな本は『おやすみなさい、フランス』(ラッセル・ホーバン)『おこだでませんように』(くすのきしげのり)『きいちゃん』(山元加津子)『ジェーン・エア』(S・ブロンテ)『氷点』(三浦綾子)『橋のない川』(住井すゑ)『西の魔女が死んだ』(梨木香歩)『翔ぶ少女』(原田マハ)



日教組養護教員部での話になるが、2016~2017年、保健研究委員だった私は「子どもの健康権を

保障するための健康診断と養護教員～学校における色覚検査を中心に考える」という研究を行った。その時に出会ったのが『色覚差別と語りづらさの社会学』(徳川直人著 生活書院 2016)である。

社会学の先生が書く文章は、なんととっても難しい。読んでも読んでも頭に入ってこない。でも読まなきゃいけない。同じ文章を何回も読み直し、わからないところは諦め、次に進む。それを繰り返しているうちに全体を3回は読んでいた。一つ一つの文章は難しくて覚えてはいないが、徳川先生から私に「安村自身の、内なる差別性はどこにあるか。自分の差別性のラインはどこにあるのか」を、問いかけられたように感じた。だれが答えを出すのか、それは自分で考えていくしかない。厳しくて辛くて重い問いかけだった。絶えず自分の感覚に「それでいいのか」と疑問を投げかけるようになり、自分の内面を自分でえぐるようなものだった。ついには徳川先生にメールをしてしまうのだが、先生のお返事にまた学びを深めた出来事になった。ただ、研究後は本棚に鎮座して、少し埃もかぶり、背表紙を眺めるだけの存在になっている。徳川先生、ほんとにごめんなさい(笑)。

20年前に私の父が亡くなった時のことをよく思い出す。2月の寒かったその日、私は熱が出た自分の幼い娘を両親に預けて職場にいた。夕方になり、両親は娘を病院に連れて行こうとしてくれていた。父は車のエンジンをかけ、母は幼い子を抱っこして助手席に乗った。一度車を降りた父は車庫に向かい、シャッターを閉めようと手を上げたその時、地面に倒れこんだ。母は父がふざけているのかと思いをかけた。だが起き上がる様子がないのと、異様な感じがして大声で隣家に助けを求め、すぐに救急車で運ばれたものの、4時間後に脳幹出血での「臨終」となった。

職場にいた私に、隣家の人から「落ち着いて聞いて」と連絡がきて、そのまますぐに病院に向か

ったが、すでに父はものを言わぬ人になっていた。父に「今までありがとね」の一言伝えるのも間に合わず、看病や付き添いをする間もなく、死なせてしまった。それがどうしても残念で、今もその思いが消えることはない。なので自分がどう死んでいくかというイメージを膨らませるとき、せめて家族には「今までありがとう」「ちょいとお先に行っとくね」を伝えるとか、ちょっとだけ心配してもらおうとか、そんな穏やかな時間があればいいなど常々考えている。だから『ライオンのおやつ』を読んだときに、確かにがんは不安だけど、ずっと泣きながら読んだけれど、自分もこんなふうに最期を迎えられたらいいなと思った。父のようにあつという間に目の前からいなくなるのは、家族にとってはとても辛いし、悲しすぎるから。

2年前に亡くなった母は、生前から「家で死にたい」と言い、「家の中心で寝たい」と言い、「寂しいから、死んでもすぐには納骨しないでほしい」と言っていた。

そんな母が、いよいよあと数日かもしれないという命の宣告を受け、「病室にいるか、ホスピスに行くか」という選択を主治医から尋ねられた。まだまだ感染症のさなかにあり、ホスピスに移っても誰も面会はできないとのことだったので、迷わず「家に連れて帰ります」とお願いした。生きるためのあらゆるチューブを外し、2日後身軽になって一緒に家に帰った。家の中心の部屋に移したベッドに寝かせてもらい、母のお気に入りのパジャマに着替えさせてもらった。「最後まで聞こえているよ」と看護師さんに言われて、孫たちも次々に来て話しかけては、少し笑ったりするのを見たり、スポンジに含ませた水をおいしそうに吸うのを見て喜んだりしていた。アイスクリームをほんの少しだけ含ませたときの、微笑んだ顔は忘れられない。手足をマッサージしたり、顔に化粧水をつけたり、髪の毛をきれいにしたりと、姉妹で交

代しながら片時もそばを離れずに母を見守った。

目を開けることもしゃべることもしなかったが、それでも母は10日間生きてくれて、11日目の早朝、私たちがふと寝てしまった間にそばを離れていってしまった。

亡くなるまでの10年ほどは一緒に住んでいたが、子どもの部活だ、学校の仕事だ、組合活動だと言いながらほとんど家にいない私に、時には大きな声で文句を言い、けんかになることもあった。この2~3年はベッドに寝ていることも多くなったが、いつも新聞と『週刊朝日』と山本周五郎や藤沢周平の本があちこちにあった。テレビよりも活字を見ている方が好きな母だった。

今、東京の借家に母の遺骨と一緒にいる。「すぐには納骨しないで」という最後の母の願いをかなえるために。そうは言ってもなあ、もう2年経つしなあ、そろそろ納骨を考えないわけではない。「でも、ここにいなくなったら今度は私が寂しくなるかなあ、ねえ、お母さん」と遺骨に話しかける日々である。

最近、本も新聞も気軽にデータで読めるようになった。母が毎週楽しみにしていた『週刊朝日』は休刊になった。これからの世の中、データの雲であふれ、好きな本がなんでも端末で読め、外国語の本もすぐに日本語音声で読んでくれるような時代がくるのかもしれない。機械で全て事足りる時代になっても、たぶん私は大切な人には手紙を書くだろうし、新聞の「天声人語」をハサミで切って保管するという事も続けていくんだろうな、と思う。

ま、どんな方法でもいいから、これからも私の人生が続く限り、ワクワクしたり笑ったり、泣けてくるような本にたくさん出会えたら、それはそれはしあわせな人生だろうなあと考えている。

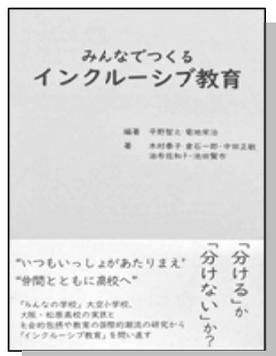
(日本教職員組合 養護教員部長)

図書紹介

『みんなでつくるインクルーシブ教育』

平野智之・菊地栄治編著

(株)アドバンテージサーバー 2023.6



本書は、(一財)教育総文化総合研究所に設置された『ゆたかな学び』としての学校づくり研究委員会の成果を、広く共有するために書籍として刊行された。新型コロナウイルス感染拡大のため、大半の会議をオンラインで実施、議論が展開されたという。研究者各々の学びが言葉として伝わるように工夫されている。

主な目次

- 序章 「ゆたかな学び」としてのインクルーシブ教育 (菊地 栄治)
- 第一章 「みんなの学校」という視点から「インクルーシブ教育」を問う (木村 泰子)
- 第二章 大阪発・高等学校のインクルーシブ教育 (平野 智之)
- 第三章 〈生きのびるため〉の包摂から、〈生きのびるを「時々」超える〉 (倉石 一郎)
- 第四章 高等学校におけるインクルーシブな組織文化の形成 (中田 正敏)
- 第五章 インクルーシブ教育の担い手としての教員 (油布 佐和子)
- 第六章 子どもから学びを奪わないために (池田 賢市)
- 終章 他者と「ゆたかさ」をつくる教育 (平野 智之)

序章で、「仕組まれた不安」を解消するための本が多数並んでいる「教育」のコーナーを例に、膨大なエネルギーと資源を浪費させる後期近代の特徴をあげる。また、「仕組まれた不安」に抗いその正体を見極め、怪しげな算盤ごと取り替えることをミッションとし、「いまという社会」の特徴から解き起こし、研究委員会に託したという。

第一章の「みんなの学校」が問いかける日本の学校現場の問題。「発達障害」と診断されれば、通常の学校から排除するといった状況が全国各地で依然増加傾向にある。学びの目的は、「その子がその子らしく育つこと」。筆者が実践してきた大空小での学びはぜひとも共有したい。

第二章は、大阪「松高」の「ともに学ぶ」学校づくりが「分ける」教育を問い直してくれる。

第三章では、「生きのびる」という言葉が投げかける現代社会での呪い。「生きのびるための・・・」薬が毒になっていないか。「毒を薬にする」戦略。とにかく立ち止まって考えよう。

第四章は、学校の「組織文化」を「指導の文化」から「対話の文化」へ、そして「協働の文化」として形成することを論じている。

第五章では、担い手側の教員の問題を掲げ、こう言っている。最も重要なのは、こうした問題を忌憚なく議論しあえる同僚を探し、つながっていくことである。

第六章では、インクルーシブ教育の要は、いかにして学習活動を、子どもたちを分離せずに行うかということに言及する。

終章では、「分ける教育」「分けなない教育」の議論から、「自分たちは排除されないという安心」「他者に対して責任を持つ」ことで公共空間へ参加し、「ゆたかな学び」を現場と社会へつなぐ。他者と「ゆたかさ」をつくる教育のための結びになっている。どの章から読み始めても、つながっていく学びがある本である。

『学校で育むアナキズム』

池田賢市著 新泉社 2023.4



猫とアナキズム？なんとなく集まり、いつの間にか解散している会合、自分の欲求を大切にしつつも相互に見ながら自然と落ち着いていく各自の寝床。著者の猫たちの「猫的生き方」が、アナキズムとの再会を促してくれたという。アナキズムを「権力支配を排除した相互扶助」としてとらえることで、学校の再生につなげていけないか、という著者の自由な思いと学校再生への願いが詰まった本である。

本書のテーマである学校は、支配関係を否定する点がアナキズムのポイントだとすれば、学校は正反対のことを実践し、支配関係の構築に躍起になり、そのために、かなりの無理を重ねている。この無理をしないための考え方として、国家、個人、学校の秩序形成作用、アナキズムによる学校再生、解放とアナキズムという5つの章にわけて書かれている。それぞれの章で立ち止まって読み進めてほしい。途中に出会う☆印の注釈や書籍についても、目を向けたい。☆17 メアリー・シェリー/芹澤恵訳『フランケンシュタイン』など（科学の進歩によって生み出され「怪物」と「個人」のあり方を考える）

著者の思索の深さと読書散策を楽しんでいる姿が想像され、学びの楽しさを実感する。

学校の秩序形成作用として、教員は子どもたちから見れば「評価者（＝権力者）」であり、他者からプラスの評価を得られるように行動することで、子どもたちをさらに追い込んでしまうことも指摘する。そして、「子どもに任せる」ことが学校再生につながり、日ごろから横のつながりとおしゃべりによって相互扶助のイメージが描けると。

縦の命令系統によって秩序を保つのではなく、「おしゃべりを」重視し、人間の自然な営みである「横のつながり」である「相互扶助」という本来のあり方を学校が取り戻すことによって、子どもたちの貴重な経験が生まれ、未来の「社会」にもより良い影響を与えていこう。

著者はこうも言っている。確かに、私が子どもだった頃の教室は「うるさかった」。職員室も「うるさかった」。何か重要なことを議論していたのではない。ただ「しゃべり」、そのことで感情が交換されていた。

実は、アナーキーであることによって、子どもも教員も安心して過ごせる学びの環境がつかれるのではないか。

本書は、2021年に刊行された『学びの本質を解きほぐす』（新泉社）で著者が提起した「学び」のあり方を具体的にどう展開していくのか、という問いへの回答にもなっている。こちらも手にとっていただきたい。

*著者は、日本教育会館の実施事業である親と子と教職員の教育相談室が主催した第29回教育相談全国研究集会（2022年11月web開催）において、講演『教育相談室だより119号』に掲載されている。（教育図書館）

最近の受入図書 ☆印は寄贈本

(2023年3月～2023年6月受入)

【日教組刊行物】

- 『健康権確立に向けて2022年』
第61回日教組養護教員部研究集会記録
日本教職員組合養護教員部編 (株)アドバンテ
ージサーバー 2023.3
- 『「うつる」病気をどう考えるのか26』
日本教職員組合養護教員部編 (株)アドバンテ
ージサーバー 2023.3
- 『わたしたちの青年部運動 第48集』
日教組青年部常任委員会 (株)アドバンテ
ージサーバー 2023.3

【教育総研刊行物】

- 『みんなでつくるインクルーシブ教育』
平野智之・菊地栄治編著 (株)アドバンテ
ージサーバー 2023.6

【教組刊行物】

- 『私たちは生きる』兵庫県療養教職員会・兵庫
県教職員組合共編 1952.4 ☆

【文部科学省関係・法令集等】

- 『文部科学統計要覧令和5年版』文部科学省
(株)ブルーホップ 2023.5
- 『地方教育費調査報告書令和3年度』文部科学
省著 (株)ブルーホップ 2023.2
- 『学校基本調査報告書令和4年度』文部科学省
著 (株)ブルーホップ 2023.3 〈初等中
等教育機関・専修学校/高等教育機関〉

【平和資料】

- 『なぜ戦争体験を継承するのか』蘭信三・小倉
康嗣・今野日出晴編 みずき書林 2021.2

『石ころに語る母たち 農村婦人の戦争体験』
小原徳志編 未来社 1964 ☆

『宮本三郎南方従軍画集』宮本三郎著 陸軍美
術協会出版部 1944.3 ☆

【防災・減災】

- 『震災復興はどう引き継がれたか』北原糸子
著 藤原書店 2023.1
- 『未来へ繋ぐ災害対策』松岡俊二・阪本真由美
寿楽浩太ほか著 有斐閣 2022.12
- 『近年の自然災害と学校防災 3』兵庫教育大学
連合大学院 防災教育研究プロジェクトチ
ーム著 協同出版 2022.3

【教育・経済・社会】

- 『現場から変える！教師の働き方』片山悠樹・
寺町晋哉・粕谷圭佑編 大月書店 2023.3
- 『私たちはどう学んでいるのか』鈴木宏昭著
筑摩書房 2022.6
- 『ペアレントクラシー』志水宏吉著 朝日新聞
出版 2022.7
- 『先生が足りない』氏岡真弓著 岩波書店
2023.4
- 『スマホ依存が脳を傷つける』川島隆太著 宝
島社 2023.4
- 『足元からの学校の安全保障』中村文夫編著
明石書店 2023.3
- 『学校で戦争を教えるということ』角田将士
著 学事出版 2023.2
- 『算数文章題が解けない子どもたち』今井むつ
み・楠見孝ほか著 岩波書店 2022.6
- 『だれが校則を決めるのか』内田良・山本宏樹
編 岩波書店 2022.12
- 『教室における政治的中立性』ダイアナ E. ヘ
ス 春風社 2021.3
- 『第2の進路指導』塩崎義明著 高文研
2023.3

- 『学校安全のリデザイン』宮田美恵子著 学事出版 2022.10
- 『まちがえる脳』櫻井芳雄著 岩波書店 2023.4
- 『教師の育て方』武田信子・多賀一郎著 学事出版 2022.7
- 『先生に知ってほしい家庭のサイン』五十嵐哲也ほか編著 少年写真新聞社 2022.11
- 『学校で育むアナキズム』池田賢市著 新泉社 2023.4
- 『少人数学級の経済学』北條雅一著 慶應義塾大学出版会 2023.4
- 『人の移動とエスニシティ』中坂恵美子・池田賢市編 明石書店 2021.8
- 『人びとのなかの冷戦世界』益田肇著 岩波書店 2021.4
- 『NPOカタリバがみんなと作った不登校-親子のための教科書』今村久美著 ダイアモンド社 2023.2
- 『北欧の教育再発見』中田麗子・佐藤裕紀ほか 北欧教育研究会 編著 明石書店 2023.4
- 『私物化』される国公立大学』駒込武編 岩波書店 2021.9
- 『3.11 大津波の対策を邪魔した男たち』島崎邦彦著 青志社 2023.3
- 『子ども・若者の居場所と貧困支援』横井敏郎編著 学事出版 2023.3
- 『女性の視点でつくるジェンダー平等教育』國分麻里編著 明石書店 2023.3
- 『不老脳』和田秀樹著 新潮社 2023.4
- 『教育学年報13』世織書房 2022.8
- 『なぜ男女の賃金に格差があるのか』クラウド・イアゴールドイン著 慶應義塾大学出版会 2023.4
- 『先生の相談室』金子由美子ほか著 中村堂 2022.12
- 『堤未果のショック・ドクトリン』堤未果著 幻冬舎 2023.5
- 『交通崩壊』市川嘉一著 新潮社 2023.5
- 『スマホ失明』川本晃司著 かんき出版 2022.12
- 『家族が誰かを殺しても』阿部恭子著 イースト・プレス 2022.11
- 『イタリアのフルインクルーシブ教育』アントネッロムーラ 著 明石書店 2022.9
- 『牧野富太郎の植物愛』大場秀章著 朝日新聞出版 2023.4
- 『戦後教育史』小国喜弘著 中央公論新社 2023.4
- 『子どものものの考え方』波多野完治著 滝沢武久著 岩波書店 1963 ☆
- 『日本の教育、どうしてこうなった?』児美川孝一郎 前川喜平著 大月書店 2022.5 ☆
- 『失敗学のすすめ』畑村洋太郎著 講談社 2000.11 ☆
- 『レイチェル・カーソン』ポールブルックス著 新潮社 1992.6 ☆
- 『フランス革命の省察』エドモンド バーク著 みすず書房 1997.10 ☆
- 『知力の発達』波多野誼余夫 稲垣佳世子著 岩波書店 1977.7 ☆
- 【家庭・芸術・文学一般】**
- 『母性保護運動史』桜井絹江著 ドメス出版 1987.5 ☆
- 『くもをさがす』西加奈子著 河出書房新社 2023.4 ☆
- 『あつあつを召し上がれ』小川糸著 新潮社 2014.5 ☆
- 『常設展示室』原田マハ著 新潮社 2021.11 ☆
- 『でーれーガールズ』原田マハ著 祥伝社 2014.10 ☆
- 『スイート・ホーム』原田マハ著 ポプラ社 2022.4 ☆
- 『慈雨』柚月裕子著 集英社 2019.4 ☆

教育図書館のご案内

《利用方法》

開館時間：午前10時～午後4時30分

開館日：（火）・（水）・（木）

閲覧：メールにて事前予約をお願いします。

✉ toshokan32304437@jec.or.jp

貸出：利用者カードの発行が必要です。

身分証明書をご持参ください。

（貸出冊数5冊 期間3週間）

レファレンス・サービス

当館所蔵の図書・雑誌、教育に関するお問い合わせはメールにてお願いいたします。

コピー：白黒1枚10円／カラー30円

《特別コーナー》

- 平和資料コーナー
反核（原発関連を含む）・平和運動、平和教育教材・実践記録、戦争体験記など
- 日教組刊行物コーナー
日教組教育新聞・教育評論・月刊JTUなど
- 教育総研刊行物コーナー
年報、理論講座、ブックレット、季刊「教育と文化」、各研究委員会報告書など
- 日教組教研全国集会報告書・県教研のまとめ
- 都道府県・高教組史誌、同機関誌
- 文部科学省統計調査報告書・刊行物
学校基本調査、国際比較、教育費、学習指導要領、指導書など
- 海老原治善文庫：元東京学芸大学教授、教育総研初代所長海老原治善氏からの寄贈書
- 鈴木喜代春文庫：児童文学者、元教育相談室相談員鈴木喜代春氏の著作本、寄贈書
- 人権・防災・減災コーナー
人権関係、東日本大震災など災害の記録等

《蔵書について》

- 教育関係図書を中心に和書、和雑誌・新聞・洋書、洋雑誌などを収蔵しています。
- 蔵書数 約70,000冊
- 教育図書館のホームページの蔵書検索の画面から検索できます。

(<https://www.jec.or.jp/tosho>)

《アクセス》

神保町駅 A1出口より徒歩3分

九段下駅 6番出口より徒歩7分

竹橋駅 1b出口より徒歩5分

水道橋駅西口 徒歩12分（JR総武線）

アクセス抜群

神保町駅から3分

802名収容の大ホール



10～300名
まで使える
会議室(18室)

1階画廊
もご利用できます

一般財団法人日本教育会館

TEL 03-3230-2831
<https://www.jec.or.jp/>
受付時間 9:00～17:00